

5-3					
主題	認知症当事者と暮らしやすい地域づくりを目指して				
副題	「おれんじドア町田」の活動を通じて認知症の正しい知識の啓発活動の取組み				
キーワード 1	地域づくり	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	14ヶ月

法人名・事業所名	社福) 賛育会 鶴川第 1 高齢者支援センター
発表者(職種)	藤田直(保健師)
共同研究(実践)者	横井恵美子(ケアマネジャー)、丸山真理奈(事務職員)、小野千尋(事務職員)

電 話	042-736-6927	F A X	042-736-6903
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	町田市から委託を受けて、第二清風園が運営している地域包括支援センターです。「薬師台」地区にある第二清風園は、今年で開設 20 年を迎えます。隣接地区の「金井」には、開設 53 年になる清風園があり、合わせて、16 事業を展開。地域住民の期待に応えられるよう、全ての事業の職員が協力しながら、積極的に地域活動に取り組んでいます。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

在宅で生活している本人家族の相談を受けており、男性の認知症に関する相談が増えた。特に、認知症初期や軽度認知障害(MCIレベル)の方であり、ほとんどが認知症について否定して、受容できていない。その背景には、「認知症＝人格が崩れる」といったメディアからの偏った情報により不安になっているからだと考えた。

そこから、認知症当事者の気持ちを一番大切にしながら、3つの取組みを行うこととした。ひとつは、支援センターより敷居を低くして、仲間と一緒に認知症を受け止めることのできる語り場づくり。「おれんじドア町田」を立ち上げ、運営する。もうひとつは、本人のやりたいことを活かせる通い場づくり。その人らしさを発揮できて、意欲的に取り組めるボランティア活動として「紅茶店」など。3つ目は、当事者と一緒に若い世代に向けた認知症サポーター養成講座の開催など、認知症についての正しい知識の普及啓発の活動である。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

これらの3つの取組みによって、当事者が認知症と共に生きることを受け入れて、地域で安心して生活できるのではないかと考えた。

認知症と診断されて、不安により自宅に閉じこもるケースが多い。年齢や程度により、高齢者支援センターの敷居が高かく、介護保険サービスの利用に馴染めないけれど、同じ病気で、同じレベルの方と話ができれば悩みを分かち合える。「認知症でも心配はいらない。」と自分自身で認知症を受け入れて行くことができるかもしれない。デイサービス以外の通い場に行き、地域との関わることによって病気の進行を遅らせることができるのではないかと考えた。

若い世代の地域住民にも認知症の正しい知識の普及啓発を行うことで、初期の段階で病気と向き合って、地域で安心して自分らしく人生を歩んでもらうことができる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

・語り場

「おれんじドア町田」（当事者中心の認知症カフェ）の活動は、2016年5月から、当事者を主体にした実行員会を設けて、協力者、内容、頻度、参加費などを話し合って準備した。2016年9月から、毎週金曜日の14時から1時間半、清風園の地域交流スペースを借りて、当事者同士の語り場としての活動を開始して、現在も継続している。

・通い場

「草引きが得意」「おいしい紅茶を入れたい」など当事者の気持ちと能力を存分に発揮できるよう、ボランティアの協力や空いている送迎車を活用し、通い場を創出した。毎週火曜日、第二清風園の中庭で、草引きのボランティア活動。毎月第3木曜日、子育てサロンのお母さん達に紅茶を提供する活動。

・正しい知識の普及啓発活動

昨年と今年の2回、当事者と一緒に企画しながら、都立高校福祉科の学生に認知症サポーター養成講座を実施した。

《4. 取り組みの結果》

特に、「おれんじドア町田」の活動は、中心となる当事者3人に加えて、4～5人の当事者、ボランティア9人、大学生3人、スタッフ9人と参加者、協力者が増え、その内の約12人が毎週集まり、2017年6月末まで合計42回、休まず開催した。講演会への参加、精神科医を招いての相談、広報誌の内容を話し合うなど活動に変化と魅力を加えながら、新たな認知症当事者やその家族の相談を受け付けた。市内の認知症カフェ一覧の作成を行政に提案した。また、ボランティアとスタッフの定期的なミーティングにより、運営ノウハウを習得した。

通い場に関して、当事者が要介護認定を受けたことにより介護保険サービスに移行し、役割を終えた活動もあった。一方で、当事者自らが、前向きな気持ちと社会と関わりの大切さを再認識して、地域の中に通い場を見つけることがあった。

《5. 考察、まとめ》

地域で安心して暮らせるためには、当事者が認知症を受け入れるだけでなく、家族や地域住民の正しい理解が重要であることを再認識した。また、初期の認知症当事者の気持ちや状態を正しく理解できていない医療介護従事者が多くいることも分かった。早期受診、早期治療、仲間との語り、社会参加の順に、初期のうちに認知症と向き合うことで、自分らしく人生を歩めることを「おれんじドア町田」から発信して、誰もが暮らしやすい地域づくりを地道に続けたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・仙台市にある「おれんじドア」
- ・「認知症カフェ読本」(2016年4月25日)、矢吹知之、中央法規出版

《8. 提案と発信》

小学校、中学校の教育カリキュラムの中に認知症サポーター養成講座を加えることで、若い世代の方が、正しい認知症の理解を深めることができる。